



麓郷の森には、五郎さんが住んでいた歴代の家々が建ち並んでいて、ドラマの感動を想い起こさせてくれます

「富良野のことは、なんでも聞いてくださいね！わかることだけはちゃんと答えますから(笑)」

2004年夏に「ぶらり旅」の取材で初めて御目にかかる以来、親しくお付き合いをいただいている森本さんに、今回の取材協力をお願いしたところ、二つ返事で快く引き受けていただきました。

倉本聰さんのエッセイ「北の人名録」にヨーデル森本として登場する森本毅さんは、創作料理の老舗「くまげら」のオーナー。地元の食材を活かした数々の名物料理を提供し続ける「くまげら」は、地元の方はもちろん、国内外の観光客からも絶大な人気を誇っています。

「気がつけば今五郎の生き方」というイベントの言葉にも表現されているように、田中邦衛さん演じる主人公・黒板五郎の生き方は、現代社会に大きなメッセージを投げかけています。今号からの「ぶらり旅」は、1年間を通じた特別編として、富良野市の四季と共に、そこに暮らす魅力溢れる人たちを紹介していきたいと思います。

昨年、ドラマ「北の国から」が放映開始から30周年を迎え、数々の記念イベントが開催された北海道・富良野市。

# 鳴海周平の 全國ぶらり旅



森本さんに、鮭の皮で作ったチエブケリと呼ばれる靴を見せていただきました。  
アイヌ民族にとって鮭は神様からの贈り物。皮もこうして無駄にせず靴や鞆にしたんですね。  
背びれがちょうど滑り止めになるから冬も重宝したようですね

森本さんの頼もしい言葉を聞いてください、1年間を通じた富良野の取材ス





畠の中に佇む山口さんご夫妻の工房は、石炭かすとコンクリートを混ぜて造った60年ほど前の建物のこと。入り口では優しいステンドグラス灯が温かく迎えてくれます

くまげら名物「山ぞく鍋」!!  
「エゾシカの肉は、名脇役。他の素材の良さを最高に引き出してくれるんです。身体も温まるでしょ?」  
本当に身体が芯から温まる!郷土自慢の鍋料理です。  
締めにいだいた雑炊もまた格別でした

くまげら名物「山ぞく鍋」!!  
「エゾシカの肉は、名脇役。他の素材の良さを最高に引き出してくれるんです。身体も温まるでしょ?」  
本当に身体が芯から温まる!郷土自慢の鍋料理です。  
締めにいだいた雑炊もまた格別でした

富良野の大自然と人の温かさに魅了され、平成5年に大阪から移住して来られた山口さんご夫妻。

ご主人の一城さんと富良野とのご縁は、なんと昭和40年代にまで遡ります。

「じつは大学時代に、仲間とテントを持って北海道へ旅行に来たことがあります。金もないから学校のグランドにテントを張らせて貰おうと思ったら、その先生が『こんな所で寝たら風邪引くから中へ入りなさい』と、家庭科室に泊ませてくれて、しかも翌朝には『ウチでご飯食べて行きなさい』と、食事までご馳走になってしまいまして(笑)。そんな当時のことを、移住してから懐かしく思い出していたら、その学校はなんと富良野だったことに気付いたんですね!縁の深さに驚きましたね。」

大阪で照明器具の製造会社を営んでいた御父様から、経営のバトンタッチを突然言い渡されたのは、大学3年生の時。ちょうど北海道旅行から戻った頃のことだったそうです。

「ある日突然、『俺はもう今日で辞めるから、あとはお前らでやれ。』と言つて、

富良野の大規模な雪景色の畠に建つ工房を訪ねました。

富良野の大自然と人の温かさに魅了され、平成5年に大阪から移住して来られた山口さんご夫妻。

ご主人の一城さんと富良野とのご縁は、なんと昭和40年代にまで遡ります。

「じつは大学時代に、仲間とテントを持って北海道へ旅行に来たことがあります。金もないから学校のグランドにテントを張らせて貰おうと思ったら、その先生が『こんな所で寝たら風邪引くから中へ入りなさい』と、家庭科室に泊ませてくれて、しかも翌朝には『ウチでご飯食べて行きなさい』と、食事までご馳走になってしまいまして(笑)。そんな当時のことを、移住してから懐かしく思い出していたら、その学校はなんと富良野だったことに気付いたんですね!縁の深さに驚きましたね。」

本当に会社にも出て来なくなりました(笑)。親父がちょうど50歳の時です。当時40人程の従業員がいましたが、一つ歳上の番頭さんと、まだ高校生だった弟と一緒に、何とかそれからの毎日を乗り切りました。

親父は「好きな車に乗れて、好きな服が着られて、好きな時にゴルフに行けて、美味しい茶漬けが食べられたら、あとはなんにも要らん。」と言つていましたが、それだけあれば、そりや充分でしよう(笑)。実際、ほとんど口を出してくることはなくて、自由にやらせてもらいましたよ。」

将来的に、御父様と同じ50歳での引退を考えていた一城さんは、経営者業も落ち着いてきた35歳の頃から、趣味としてステンドグラスの制作に取り組み始めます。

自社で製造した年間百万台以上の照明器具のうち、何個かがボロボロになつて返つてくる様子を「ずっと頑張ってきたのにああ……」と、長年可哀想に思つて見てきたことから、「両手で大切に持つていただける製品」をずっと作りたいと思つていたそうです。

「引退後はどこかに移住するつもりでいましたからね。新しい土地に住まいを構えるためには、自分が何か発信できるところが少ないので、自分なりに、どういった想いがあつたんです。それも趣味の域ではなく、生計が成り立つぐらいでなければならなかったのです。ある時、いつもお世話になつてゐるペンションのオーナーさんに、私が趣味で作ったランプを差し上げたことがあつたのですが、ちょうどその頃日本一周で富良野に立ち寄つた

幸い、作品を気に入ってくれた方から次々と紹介をいただき、サッポロビール園のステンドグラスランプや、帝国ホテル大阪のロビー天井・ステンドグラス照明、パナソニック東京汐留ビル・ル・ルオー美術館のステンドグラスパネルなどを納めさせていただくことができました。」

「引退後はどこかに移住するつもりでいましたからね。新しい土地に住まいを構えるためには、自分が何か発信できるところが少ないので、自分なりに、どういった想いがあつたんです。それも趣味の域ではなく、生計が成り立つぐらいでなければならなかったのです。ある時、いつもお世話になつてゐるペンションのオーナーさんに、私が趣味で作ったランプを差し上げたことがあつたのですが、ちょうどその頃日本一周で富良野に立ち寄つた

彼がそのランプを見て『僕もステンドグラスのランプを作っているから、何か訊きたいことがあつたらいつでも連絡をください。』と伝えてくれていたようなんです。既に個展を開いているほどの人でしたから、ぜひいろいろとお話を聴きたくて、さっそく会社に電話をしてみました。』

彼について歩くことを決めたんです。』  
『最初は本当に驚きましたよ。会社を辞めてついて来てくれる、って言うんだから。ついて来てもいいけど責任は取らないよ、という約束でしたが、結局こういう形で責任を取ってしまいましてね(笑)。』

ところが、日本一周中のためなかなか連絡がつかず、ようやく会えたのは半年が過ぎた頃。大阪の百貨店で開催されていた北海道物産展の会場でした。

「富良野でいつもお世話になっていた『唯我獨尊』の宮田さんが出店しているブースで、やつと会うことができたんです。当時の彼は、ステンドグラスのランプ、パネルとか、ガラスの花入れ、大皿などを手がけ始めた頃で、個展でも独創的な作品をどんどん発表していました。じつは、私もその頃ちょうど生け花の免許をいただいたばかりだったので、彼の作品を見てすぐに『この花瓶にお花を活けてみたい!』と思つたんです。』

この出会いがきっかけで、千香子さんは全国各地で開催される一城さんの個展会場に同行して花を活けて歩くことになりました。

「自分の気持ちにいつも正直でいたい、と思っていましたから、会社を辞めて

2年後の平成8年、お二人は結婚。出会いの地である北海道・富良野市で、創作の拠点を構えることになります。結婚式は、新富良野プリンスホテルの『ニンゲルテラス』で、記念すべき一組めのカッップルとして、地元のたくさんの方々が祝福してくれました。『本当に夢のようでした。そして、まるで旧友のように祝福してくれた地元の皆さんとの温かさ。今でもあの時の感動は忘れられません。』

憧れの地・富良野への移住は、「ガラス作品」という新しい分野での成功があつたからこそ叶つた夢でもあります。山口さんご夫妻語る山口さんご夫妻。

「親父は、僕がガラスをやることにまったく理解がありませんでした。『お前、仕事ホッポラカして、そんなこ

とばつかしよつて!!』と、いつも怒っていましたね。そんな時、地元・心斎橋にある銀座和光大阪店さんから『作品の展示会を開いてみませんか?』といふありがたい話をいただきました。銀座和光さんと言えば、それはたいへんなブランドでしたから、もう一つ返事でお願いしました。そうしたら、その展示会に親父が来たんですよ。それでね、お店の人にくう言つたんです。『30年前はこの店の前を通ることができました。20年前は中へ入ることができました。10年前はようやく中で何かを買なうことができました。そして今は、たぶんたいがいのものは買えるでしょう。でも、こうしてウチの息子が創った作品を和光さんに買ってもらえたことが、いちばん嬉しい。』

この体験があつて、僕は初めて『この道でやつていける』と思えたんです。』

山口さんご夫妻の作品から感じられる「優しさと温かさ」は、こうした体験が原点にあつたんですね。



御二人の会話の様子からも、楽しげと喜びいっぱいの「三人旅」の様子が伝わってきます。

「大阪に居た時にはあまり意識したことのない鳥の声や風の音、そして車が通る音でさえも、ここではまるで音楽のように聴こえます。その度に、ああ、大好きな富良野に住んでいるんだなあ、と心がとても穏やかになるんです。」

手作りには想いが込もります。これからも富良野の自然と共に、温かさの伝わる作品を創つていきたいですね。」

コンセプトは「スローワーク」という自然界のリズムに合わせたライフスタイルが産み出す作品は、これからも多くの人たちを魅了し続けることでしょう。



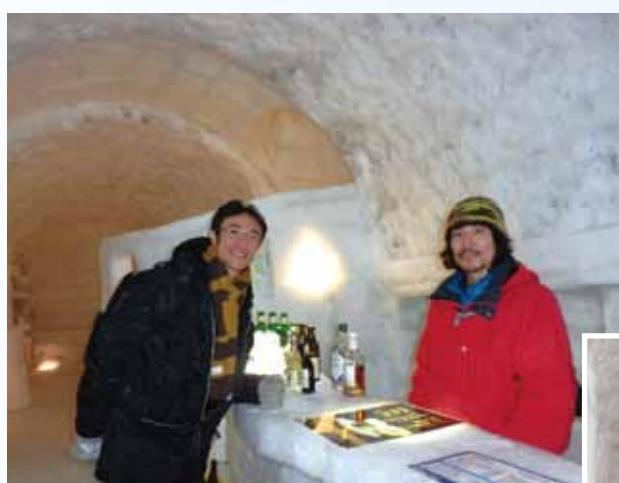
ドラマ「優しい時間」の舞台となった喫茶店「森の時計」。現在も、ドラマの世界そのままの空間で、挽きたてのコーヒーを楽しむことができます



山口さんご夫妻が結婚式を挙げた「 ninguru teeras」。 ninguruとは、倉本聰さんの著書「ninguru」に登場する身長15cmほど の「森の知恵者」で、古くから北海道の森に住んでいるとされています。ログハウスでできた店舗では、ぬくもりに満ちた手作りの作品たちが、森の精と共に温かく迎えてくれます

くまげりの森本さんから紹介いただいた、富良野を代表するリゾートホテル・新富良野プリンスホテルさん。敷地内には倉本聰「マの舞台」にもなった「くわらの」があり、国内外から訪れる人たちを、四季を通じて楽しませてくれています。

ニングルテラスにある  
山口さんのお店「ガラスの家」。  
素敵なお土産が並んでいます



冬だけの限定施設  
「ふらの歓寒村」では、すべて氷でできた  
アイスバーも  
楽しむことができます。  
氷のカウンターで、  
スタッフの小松さんと  
記念撮影



## 取材協力

くまげり  
0167・37・2345  
<http://www.princehotels.co.jp/newfurano/kumagera/>

ふらのガラス屋さん  
0167・39・0560  
<http://web.mac.com/kao560/>

新富良野プリンスホテル  
0167・22・1111  
<http://www.princehotels.co.jp/newfurano/>